農と食で高める地域の力

第10回
都市農業を牽引する東京都練馬区の農業体験農園
～その1～

食環境ジャーナリスト／食総合プロデューサー　金丸　弘美

参加者が増える都市の農業体験農園

東京都練馬区は、農家の新鮮野菜が身近で手に入ること、区民農園が多くあり区民参加の野菜づくりまでできること、人との出会いとコミュケーションの場になることなどから、大人気となっている。

行政も、農地の保全、農業支援を行い、農地のあることによる豊かさを、積極的にアピールしている。

練馬区は、東京23区で、農地がいちばん多い。23区全体で471・1㌶。このうち練馬区は197・7㌶ある。次いで世田谷区94・6㌶、足立区46・5㌶、江戸川区43・9㌶、杉並区35・1㌶、葛飾区31・9㌶、板橋区14・2㌶、大田区2・6㌶、目黒区2・4㌶、中野区は2・2㌶となっている（東京都農業会議、平成31年）。

農家戸数は421戸ある（練馬区「農業経営実態調査」令和2年度）。1戸あたりの農地面積は0・55㌶で、全国平均の3・1㌶からすると小さいが、都市ならではの身近な農業として、新鮮な農産物の収穫体験ができることなどで、多くの人に親しまれている。

JAの農産物販売所も、全国でももっとも早い時期に生

まれた。区内に4カ所がある。農家が直接農産物を直売する農産物直売所は約270カ所ある。

野菜は、イチゴ、インゲン、えだまめ、オクラ、カブ、カボチャ、カリフラワー、キャベツ、小松菜、サツマイモ、サトイモ、ジャガイモ、春菊、スイカ、ダイコン、タケノコ、トマト、トウモロコシ、玉ねぎ、ナス、ニンジン、ネギ、白菜、レタス、ほうれん草などがある。

果物は、イチジク、梅、柿、キウイフルーツ、栗、ぶどう、ブルーベリー、ミカン、柚子などがある。ミカン、柿、イチゴ、ぶどう、ブルーベリーなどは摘み取りができる農園も多くある。

なかでも、区民が自ら栽培ができる区民農園が豊富で、人気になっている。コロナ禍で、外食や旅行などが制限されるなか、広々とした農地で、新鮮でおいしい野菜が手に入り、運動にも健康にも良く、環境もいいと、参加者が増えている。

練馬区には、農園を借りて野菜栽培ができる区民農園が1926区画。

農家が農地を開放し、プロの農家が野菜づくりを教えてくれる農業体験農園が、18園で1963区画ある。都市でありながら、身近に野菜づくりができ、かつ区民が交流できる場が数多くある。

区民農園で休息施設（クラブハウス）があるのが5園。農具庫（共用・個人用）、クラブハウス（トイレ・調理設備・休息室・更衣室付）、生垣、水道がある。247区画。1区画は約30平方メートル（利用料金月額1600円）。障害者優先区画は約20平方メートル（月額1100円）。利用期間は1年11カ月。

休息施設（クラブハウス）なしが22園。パーゴラ（pergola＝木材などで組んだ棚）、簡易トイレ、水道、ベンチ、農具庫、看板、掲示板がある（一部、トイレ、ベンチがないところがある）。

とくに注目されているのが、練馬区で1996年に始まった、農家が農地を開放し農家のプロが野菜づくりを教える「練馬方式」と言われる「農業体験農園」だ。18園があり、1963区画。

1区画は30平方メートル。（果樹栽培の体験もある「旬感倶楽部」は21平方メートル）

「農業体験農園」の仕組みは、農家が農地を開放して区画割りをし、野菜づくりを1年間指導して、種まきから収穫までできるというもの。

畑には、種、バケツ、如雨露、鍬、肥料、マルチ（雑草

対策や保温、保湿に優れたシート）などが用意されていて、手ぶらで行ける。トイレ、水道、農具類、休息場が用意してある。

年間の作付け表が用意してあり、その計画にそって参加者は野菜づくりを学び育てる。インゲン、トウモロコシ、えだまめ、ダイコン、ジャガイモ、ほうれん草、ラディシュ、キュウリ、トマト、ナスなど、普段食べるものが収穫できる。

期間は11カ月。最長5年間参加でき、参加費は年間5万円。区民は区の補助があり3万8千円で参加できる。

区は施設整備費・管理運営費の助成と利用募集者の援助を行っている。

農家が野菜づくりを教える先駆け加藤農園

練馬区は、全国の先駆けとなった、農家が教える農業体験農園が始まったところとして知られる。「練馬方式」とも呼ばれている。今では、野菜づくりを教える農業体験農園のノウハウが広まり、企業でも行われるようになり、都内で100カ所以上にも広がった。全国ではおおむね500カ所にもなっている。

農業体験農園を最初に始めたのは、練馬区南大泉の「緑と農の体験塾」の加藤義松さん。

西武池袋線の池袋駅から約20分。保谷駅から徒歩10分ほどのところにある。

加藤さんは300年続く江戸期からの農家で「練馬方式」と言われる野菜づくりを教える「農業体験農園」の発案者。始まったのは1996年。

この農業体験農園の開設には理由がある。練馬区では管理が難しくなった農地を借りて、あるいは購入して、区民

加藤義松さん。農家が教える農業体験農園の発案者

農園として貸し出している。

練馬区の区民農園の開設は早く、１９７６（昭和48）年から実施されていた。

しかし、野菜づくりを教える人がいないので、上手に栽培できない人もいる。実際、区民農園の参加者には、野菜づくりのコツを教えてほしいと、加藤さんのところにやってくる人もいた。

上手にできても、貸し出し期間が1年11カ月と短いために、長く野菜づくりをしたくても続けられない。上手に栽培しても盗まれることもある。畑の手入れが悪いと区が整備して土地を畑に戻すがそれには手間もかかる。

それを傍目にみていた加藤さんは、横浜にあった市民参加型の農園を参考に、新たに独自の体験農園を生み出した。

加藤さんは、それまでは普通の農家。練馬区はキャベツ栽培が多かった。しかし都市で野菜栽培をするには農地が狭い。野菜の価格も高くない。とくに流通が発達するようになると、遠くの大型の産地からのキャベツが都市のスーパーに持ち込まれ、安く売られるようにもなった。

農業体験農園は、これまでの農業とはまったく異なるスタイル。農家は野菜を販売するのではなく、野菜づくりを一般の人に教える。畑の管理は農家が行い、農地を開放して区画割して、講習で野菜づくりを教えるというもの。

参加者は最長5年間、野菜づくりを学ぶことができる。それによって、自分の庭先でも、あるいは、別に区民農園を借りて、独自に野菜づくりができるようになる。習って、区民農園を借りれば、野菜づくりも上手くなるというわけだ。そして農家は、講習で安定収入を得るというもの。

農家が教える農業体験農園が都内に広がる

開園当時は「始めても人が来るのか。来ても定年退職の高齢者ばかりではなかろうか」などと心配されていたものだ。ところが今では、親子連れから、30代、40代、70代まで、幅広い年齢層が参加する人気の農園となっている。とくにコロナ禍になってからは、出かけるところが限られたなかで、身近なところで野菜づくりができて、健康的、密にもならないと、さらに人気が高まった。

最初に農業体験農園を始めた加藤義松さんは、現在「全国農業体験農園協会・理事長」。野菜づくりの著作も多くある。

加藤農園は大きく3つの区画に分かれている。

1　小さいお子さん、高齢者の方が作れる「はたけ倶楽部」。小さいものはプランターで、その他は畑で作るもの。12区画。参加費は年間3万8千円。

2　「アシスト農園」。多忙で畑に来られなかったりする

方のためのアシスト付きの農園。12区画。1区画15平方メートル。年間で30種類の野菜を栽培。参加費は5万円。

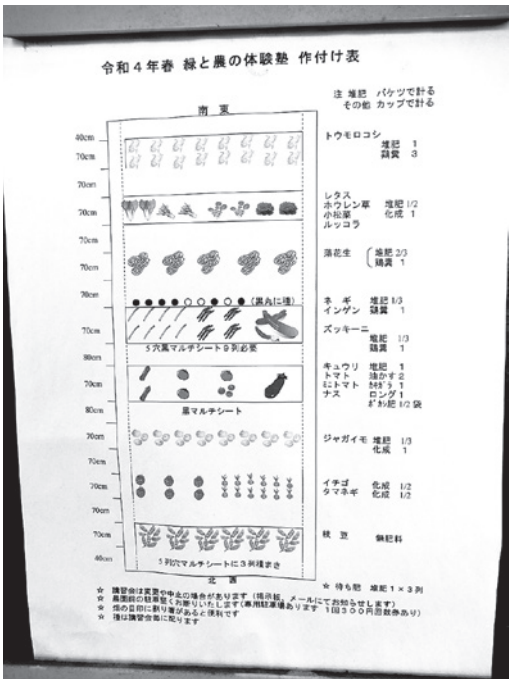
3　農業体験農園。講習付きで野菜づくりをするもの。146区画。1区画30平方メートル。参加費5万円（練馬区民は3万8千円）。

畑には駐車スペースがあり自転車が50台置けるようにもなっている。トイレもある。

講習は金曜日、日曜日が10時、土曜日が10時と14時にある。

参加者には事前に半年間の作付け計画予定や、注意事項、栽培のポイントなどの資料が配布される。講習では、その週に行う準備、種や、肥料などの説明が30分ほど。畑の隅にある屋根と机と長椅子が用意された場所で行われ、それ

体験農園の参加者への講習。中央に立っているのが加藤義松さん



加藤農園の一年間の作付け計画表。どの時期、どの種を、どの間隔でまくかまで書かれている

から、めいめいの畑の場所で、教わったとおりの作業を行う。

畑の隅には、講義ができる屋根付きの道具置き場があり、そこに種、肥料、如雨露、鍬を始め、栽培に必要な道具類はすべて揃えられている。

講習では話が丁寧。しかも、よどみなくこまやか。みんなの前で、鍬で畑を鋤きながら要領を解説する。畑でいざ栽培となってわからないことがあっても、加藤さんの農園には農園アドバイザーがいる。これまで農園に通って野菜づくりを習得した7名が任命されている。初めての人をサポートできるようにしている。

加藤さんの農園のホームページが充実していて、野菜づくりのQ&Aもこまかく書いてある。現場の畑では入り口の看板にQRコードもあって、そこから農園のホームペー

畑の隅には道具置き場があり栽培に必要な道具がすべて揃えられている

加藤農園の農園アドバイザーのみなさん

ジにも飛べるようになっている。農園に参加する人たちが、30代、40代が中心となって手伝っていて、若い人たちのサポートで発信ができるようにしてある。講習も、どうしても現地に来られない人にはＺｏｏｍでも行われている。

地域コミュケーションの場として広がる

加藤さんの話は、江戸期からの農業のこと、肥料がどこからくるのか、肥料の役割、鍬の使い方、マルチの張り方、種のまき方、間隔など、じつにこまやか。キャベツやトマトなども品種が２００種類以上あり、その違いや、実際に栽培して、食べてみて、最上のものを収穫して食べることの喜びまで、レクチャーがある。

５月、11月には持ち寄り料理の収穫祭も行われていて、１５０名近くが参加し、地域のコミュニティの場になっている。ＮＰＯ法人やボランティアが運営する練馬区内３カ所の『こども食堂』に月２回、農業体験農園で収穫した野菜の提供も行っている。ゴルフの会、親子での花火会なども行われている。

「収穫祭では自分の野菜で作った料理を持ち寄ります。食事のイベントですね。１５０名くらい集まります。畑の横に椅子もある。屋根付きの部屋もあります。夏は、畑で線香花火をしたり、スイカ割をしたりします。子どもたちが喜びますね」と加藤さん。

実は、海外の市民農園の視察旅行も実施されている。加藤さんが農業体験農園を始めて間もなく、海外の商社に勤めていた方がいて、ハワイにも市民農園があるということから、市民農園の視察旅行が行われた。それがきっかけで、

講義のあと畑で実際のマルチの張り方を指導する加藤さん（右手前）

海外の市民農園や農業を学ぶツアーが生まれ、これまで台湾、ベトナム、タイ、中国など、17カ国への研修旅行が生まれた。参加希望者を募り、約30名近くが参加してきた。コロナ禍になってからは中断しているが、収束後は再開予定だ。

「以前、東京農業大学が参加者の調査を行いました。参加目的の75％は野菜づくりを覚えたいという方々。残りは、農業者になりたい、ボランティア活動をしたい、野菜づくりの技術を覚えて海外へ技術指導に参加したいという、目的意識の高い方も多いことがわかりました。講習をする側にも、それなりのレベルが求められますね」と加藤さん。

実際、練馬区で野菜づくりを学び、地方で農業を行う人や、小さな畑付きの住宅がある地域に移住して、自家用の野菜づくりをする人も、多く生まれている。

加藤さんの家の近くにイギリスの方が引っ越しをしてきた。なぜと尋ねたら、ベジタリアンで、新鮮な野菜が身近で安く手に入るからという理由からだった。

農業体験農園から、国際交流にまで広がっているから驚きだ。

加藤義松さんの息子さんは、JAでの勤務のあと、「緑と農の体験塾」のお隣の農地1・5ヘクタールを借り受けて、トマトを中心に農業を行っている。ここでは、コインロッカー式無人販売機で販売されるカラフルトマトが大人気だ。

農業体験農園という新しい農業のスタイルを生み出した「練馬方式」。この園主会があり、現在の園主会長は、練馬区土支田にある「イガさんの畑」の五十嵐透さんで3代目。西武池袋線石神井公園駅からバスで20分ほどのところにあ

五十嵐透さんの農業体験農園での指導。右端が五十嵐さん

る。五十嵐さんは、会社勤めのあと、父親が亡くなったこともあり農業を継ぐことに。最初はキャベツ栽培だったが、加藤さんの体験農園に興味を持ち、やり方を学び、1999年からスタートした。1区画3メートル×10メートルの30平方メートルの体験農園。

福祉作業所の畑のお手伝いで参加しているボランティアの方と五十嵐さん（左から二人目）

全部で48アール。自分の畑では80区画。お隣の方が高齢で農業が維持できなくなったことから、借り受けた農地で37区画。全部で117区画ある。

「農業体験の価値は、参加した人が自分の生活の一部として楽しんでもらえること。野菜を収穫して日常に食べる人が多い。小さいお子さんがいて体験させたいという人もいる。畑が身近にあることを喜んでくださる。朝食前や、夕ご飯の買い物ついでに畑に来て野菜を摘んで、食事に使う人もいます。参加申し込みされる方の8～9割は次の年も申し込みされます。近所の福祉作業所の方から野菜づくりをやりたいと話がありました。ノウハウを習得したうえで、独自に野菜を作れるようにしたいとのことで、障害の方々の野菜づくりが、2年前から4区画分で始まりました」と五十嵐さん。

体験農園の17農園では秋に、参加した人たちのつくった野菜の品評会も開催されている。それぞれの園主が夏場に野菜づくりの様子を見て、10区画の参加者を推薦。それを五十嵐さんと農協の職員が巡り、賞を贈るというもの。練馬区の農業は多彩な広がりを見せている。

（以下次号）